



# プログラム報告

## 長岡プログラム

新潟県長岡市は合同学生会議の最初の滞在地です。長岡市では、市の南東部に位置する旧山古志村に滞在しました。「日本の原風景」とも言われ、豊かな自然と文化を持つ山古志地区は、参加者間の緊張を和らげ共同生活を営むに適した環境でした。また、都心部では実感できない自然と寄り添う人々の暮らしや、長岡市の戦災や震災からの復興の歴史を通して、日本の歴史・文化についての発見が多くありました。これは、イスラエル人・パレスチナ人参加者のみならず、日本人参加者にとっても大変有意義でした。滞在中は村民の方々から差し入れや温かいおもてなしを受け、全体的に和やかな雰囲気のもと各プログラムが行なわれました。

**11 日** 午前中にイスラエル人参加者が、夜にパレスチナ人参加者が成田空港に到着しました。参加者はイスラエル・パレスチナとは大きく異なる日本の景色に参加者は興味津々で、いたるところで写真を撮っていました。また、まだ出会っていない他の地域の参加者やこの後ある 2 週間の合宿に対して参加者それぞれが不安と期待が入り混じった不思議な気持ちを抱えているようでした。

**12 日** 日本人・イスラエル人・パレスチナ人参加者が、朝初めて一同に会しました。緊張のなか握手を交わし、自己紹介をしていきました。そ



して、新潟県長岡市へ移動しましたが、バスの中でもイスラエル人・パレスチナ人・日本人参加者はばらばらに座り、あまり話すことはありませんでした。しかし、山古志地区が近づき目の前に緑豊かな景色が広がるにつれ、参加者は合宿生活への期待を高めていました。到着後は、早速夕食を一緒に調理し食べました。そして、日が落ちた中、参加者全員で宿舎の近隣を散策し、参加者の中の緊張もだんだんほどけていきました。

**13 日** 移動日から一夜明け、ようやく合同学生会議が本格的な始まりを迎えました。この日は参加者の緊張を解くためのプログラムがいくつか用意されました。午前中は皆でスポーツを行い、午後はお互いの地域の文化を紹介する「文化紹介の時間」が持たれました。それぞれの地域の伝統的な衣服や食事、都市の様子や日常生活を、スライドや実物を見せなが

ら紹介しました。イスラエル人参加者からは、ユダヤ教に密接に結びつき、かつ世俗的な様相をも色濃く見せるイスラエルの多様な日常生活が、パレスチナ人参加者からは、伝統的な衣服や食事について紹介がありました。日本人参加者からは世界でも定評を得た日本のアニメやゲーム機器が紹介され、ゲーム機器を囲んで大いに盛り上がりました。夕食の後は参加者一人ひとりが、合同学生会議に参加した動機や、合同学生会議に期待することを述べ合う時間を持ちました。この日のプログラムによって参加者の緊張は解け、翌日から始まるディスカッションを中心としたプログラムへの期待が高まりました。

**14 日** 午前中は、初めての本格的なディスカッション「歴史認識について」が行われました。ディスカッションは、パレスチナ人参加者が持参したイスラエル・パレスチナ問題の発端を解説したビデオの上映から始まりました。上映の後、ディスカッションが始まりましたが、初めは冷静に議論を行っていたものの、後半は方向性の定まらない言い合いになってしまいました。しかし、ディスカッションの最後には、イスラエル人・パレスチナ人参加者同士が握手を交わし、有意義なディスカッションであったことが確認されました。

午後には滞在先の山古志地区の見学に向かいました。山古志支所にて、山古志地区の特徴・名産物、2004年の新潟県中越地震に関するお話を聞いたのち、山古志支所の方の案内のもと、バスにて山古志地区を見学しました。2004年に発生した新潟県中越地震によって形成された天然ダムや、今なお残る土砂に埋もれた民家跡などを見学し、支所の方より復興の現状などの説明を受けました。また、震災の爪痕ばかりでなく、山古志地区が誇る「中山隧道(なかやまずいどう)」も見学しました。「中山隧道」は、冬季に大量の降雪によって厳しい峠越えを強いられてきた山古志住民が、周辺地域へのアクセスを確保するため1933年から掘削を開始した手掘りのトンネルです。全長877メートルに渡るトンネルを参加者全員で懐中電灯を片手に探索しました。



**15 日** この日のディスカッションは「平和とは何か」「平和の阻害要因について」というテーマで、午前と午後の二部に分けて行いました。前半のディスカッションでは、紛争の犠牲となった経験に話が及び、辛い経験を思い出した参加者が涙ぐむ場面もありました。

また、この日のディスカッションから日本人参加者側から質問をする時間が設けられました。これは激しいディスカッションのなかで発言の機会を逃しがちな日本人参加者が、積極的にディスカッションに関われるようにと前日のミーティングで提案されたことでした。

**16 日** この日は終日、長岡市三島地区の祭りである「三島祭り」に参加しました。三島地区は、2004年に新潟県中越地震によって山古志地区が大きな被害を受けたため、第3回合同学生会議(2005)、第4回合同学生会議(2006)が開催された地域です。三島祭りの目玉となっているのは、地元の杉を利用した「丸太切り選手権大会」です。この大会は二人一組のチームを作り、大きなノコギリを用いて丸太を切り落とすタイムを競うトーナメント形式のイベントです。単なる力勝負ではなく、チームワークやスパートをかける



るタイミングなどの戦術が重要なポイントです。これまでに経験したことのない競技に四苦八苦しながらも、パートナーと力を合わせて一生懸命、競技に挑みました。残念ながら上位に入ることにはなりませんでした。イスラエル人・パレスチナ人参加者にとっては、異国の地のお祭りに参加し貴重な思い出を作れたようでした。お祭りの終盤には、地域の方々と共に神輿を担ぎました。肩におしかかる神輿の重圧に顔を歪めながらも、威勢よく掛け声を発して、神輿を担ぐ一体感と高揚感を楽しみました。

**17 日** この日の午前中は、特にプログラムは行わず休息の時間を取りました。宿舎の周辺を散策したり、雑談に興じたり各々が自由に過ごしました。

午後は翌日に行われる市民交流会の準備を行いました。市民交流会で長岡の復興の歴史を紹介してくれる「長岡平和交流大使」が、長岡市国際交流センターの方と山古志の宿舎を訪問しました。「長岡平和交流大使」が長岡市の気候・人口といった市の概略を説明し、翌日の市民交流会本番に向けて舞台を整えました。

**18 日** 18日は長岡市中心部に位置する長岡市国際交流センター「地球広場」にて、長岡市民を対象とした「市民交流会～復興への想い、平和への願い～」を開催しました。この交流会は合同学生会議の二番目の目

的である「イスラエル・パレスチナ問題の関心の喚起」「対話と交流の成果の共有」をもとに企画されたものです。「双方向的な交流会」が目指された今回の市民交流会では、前述の「長岡平和交流大使」が「復興への想い」を、イスラエル人・パレスチナ人参加者が「平和への願い」を語り合いました。

※長岡市国際交流センター「地球広場」は、長岡市の青少年の国際交流の促進ならびに、長岡市に在住する外国人居住者の支援を目的とした施設です。当団体も長岡市での活動に際し、多くのご協力を頂いています。

**19日** 19日は、長岡プログラムでの最後のディスカッション「多様性について」「メディア・教育について」を行ないました。長岡プログラム前半のディスカッションの後、お祭りへの参加や市民交流会を経て、終盤で建設的なディスカッションが行われることが期待されていましたが、個々の紛争の経験に関する発言から、激しい口論になりました。夕食後のミーティングでも、ディスカッションに対して各参加者から不満が出され、一時、険悪な雰囲気になりました。しかし、イスラエル人・パレスチナ人参加者は自発的に集まり、事態の打開に向けて夜遅くまで何事か話し合っていました。



**20日** 20日の午前は、次の開催地である長野市で行なわれる「高校生プログラム」の準備に充てられました。その準備の冒頭、イスラエル人・パレスチナ人参加者から、前日のディスカッションが感情的な言い合いに終始してしまったこと、そのため険悪な雰囲気のまま一日を終えたことへの反省と改善への決意が述べられました。

イスラエル人・パレスチナ人参加者の前向きな姿勢によって、合同学生会議は再び活気を取り戻しました。

## 長野プログラム

合同学生会議2箇所目の滞在地となる長野市は、四方を山で囲まれた自然豊かな場所です。また、善光寺を中心とする門前町として日本の文化や伝統を感じられる街でもあります。長野での滞在中は高校生や地域の方など様々な方と交流する機会を持ちました。それらの交流を通して、参加者は新しい視野を得て各々の考えを深めていくと共に、様々な共同作業を持つことで参加者間の交流も活発に行われるようになりました。

**21 日** 長岡市国際交流センターの方に見送られながら山古志を発ち、次の滞在地となる長野へ。長野では、小田切地区の方々や同じ期間に宿泊していた朝鮮学校の方々が歓迎会を開催し、日本の謡やオカリナによる日本の歌の演奏を披露してくださいました。

**22 日** 長野高校生プログラム 1 日目。まずは、アイスブレイキングで、名前を呼び合うゲームやイスラエル、パレスチナのゲームをしたり、高校生活についてグループに分かれて話したりし交流を深めました。夕食の時間にはバーベキューを参加者全員で楽しみました。その後、イスラエル・パレスチナの学生が自分たちの紛争に関する経験を 1 人ずつ話しました。自爆攻撃に遭いそうになったこと、兵役での体験、自分の家が攻撃されたこと、検問所での出来事などの話に、高校生は紛争の現実を目の当たりにしたようでした。

**23 日** 高校生プログラム 2 日目。午前中、まずイスラエル人・パレスチナ人参加者が共同で、「分離壁」、イスラエル・パレスチナの多様性、教育をトピックにレクチャーを行い、その後小さなグループに分かれて質疑応答の時間をもちました。午後は、一国家／二国家和平案、「分離壁」、難民問題、という紛争の焦点について解決策を選択肢から選び各自が理由を述べていくという小討論会を行いました。このプログラムの中では、国籍とアイデンティティの関係や理想と現実の差などの課題が浮き彫りになりました。その後、夕食の時間には、イスラエル・パレスチナの料理を参加者が一緒につくり、味わいました。



**24 日** 高校生プログラム 3 日目。お別れ会の中では、高校生、イスラエル人・パレスチナ人参加者がそれぞれ感想を述べ合い、最後に寄せ書きをしました。長野駅で記念撮影し高校生参加者と解散した後、日本人・イスラエル人・パレスチナ人参加者で、ボランティアガイドの方の案内のもと、松代大本営と善光寺などをまわりました。日本の戦争の歴史を表す地下壕や城下町の面影を残す松代の町並み、仏教の考えが随所に見られる善光寺の建物を見て、参加者はとても喜んでいました。

**25 日** 午前中はエルサレム問題に関するディスカッションを行いました。参加者間で合意に達することができ、拍手をしながら終わることができました。午後は、小田切地区の方に来ていただき、わらじ作りとおやき作りを体験しました。慣れない作業に悪戦苦闘でしたが、とても楽しんでいたようです。イスラエル人・パレスチナ人参加者も、ダンスや歌を披露しました。



**26 日** 午前中は、水問題に関するディスカッションを行いました。その後、昼食をはさみながら、合同学生会議を通して学んだことや感じたことを参加者一人ひとりが発表していきました。多くの参加者が、最初にもった他の参加者に対する印象が大きく変わったことを述べ、合同学生会議の中で得た多くのことを共有しました。また、イスラエル・パレスチナで活動するNGOについても情報を交換しました。夜には、東京で行う2つのイベントについて打ち合わせを行い、発表内容などを考えました。

## 東京プログラム

合同学生会議最後の滞在地となる東京都では、合同学生会議で生まれた思いを発信することを目的にむさしの交流イベントとシンポジウムという2つのイベントを開催しました。イベントの実施を通じて、参加者各々が合同学生会議を振り返ると共に、互いの思いを知ることとなりました。また、自由時間には都内を散策し、残り少ない共に過ごせる時間を楽しんでいました。

**27 日** 長野を後にし、最後の滞在地・東京都に向かいました。到着後一息つく間もなく、次の日に行う武蔵野市でのイベントの打ち合わせをし、その後は宿舎近くの新宿付近を散策しました。ネオンの眩しい街並みに参加者は興奮し、写真を多く撮っていました。

**28 日** 武蔵野市でイベントを行いました。武蔵野市は第1回合同学生会議から共催をいただき毎年イベントを開催しています。特に、過去の合同学生会議で植えたオリーブの木は日本・イスラエル・パレスチナの学生の

平和と友情の思いが詰まったものです。今年のイベントは、前半はスイングビルで、来場者の方と小さなグループに分かれて現地での生活や合同学生会議での経験について話しました。後半はグリーンパーク遊歩道に移動し、イスラエル人・パレスチナ人参加者による平和のスピーチとオリーブの木の植樹をしました。

**29 日** 合同学生会議の集大成となるシンポジウムを東京都渋谷区にある JICA 地球ひろばで行いました。シンポジウムでは日本女子大学・臼杵陽教授の講演、代表の平山による合同学生会議の説明の後、イスラエル人・パレスチナ人参加者が一人ひとり、合同学生会議の感想を述べました。互いのスピーチを聞きあう中で、参加者のそれぞれの思いも深まったようでした。また、来場者の方も参加者の思いのこもったスピーチを感慨深そうに聞いていました。

**30 日** 日中は参加者が小グループに分かれて東京観光をしました。それぞれ思い思いの時間を楽しんだようです。そして、夜は、参加者一人ひとりにメッセージを書き合い、最後に拍手をしながら寄せ書きのカードを渡していきました。色紙いっぱい書かれたメッセージを参加者一人ひとりかみ締めるように読んでいました。

**31 日** 合同学生会議の最終日。離日の早いイスラエル人参加者を空港で見送りました。空港では、参加者が大好きなユダヤ教の安息日明けの儀式の歌や三島まつりの音頭などを歌い、最後のときを楽しみました。そして、参加者たちは、出発の直前まで写真を取り合ったり抱き合ったりして別れを惜しみました。「さよなら」ではなく「また会おう」と誓い合いながら参加者は別れていき、こうして多くの思い出が詰まった合同学生会議の幕が下りました。

